ひかり新聞

共生共助の社会をめざす

2023.5.20
No.47
一般社団法人
ひかりプロジェクト

震災12年を経て気仙沼の今

鹿折の街を望む▲

▼気仙沼港「海と生きる」

今年3月気仙沼を訪れた。震災から12年、街の人々がどんな思いを持っておられるか、数名の方に話を聞いた。

陣山山頂にある気仙沼市復興祈念公園で「祈りの帆（セイル）」のモニュメントを見た。脇には犠牲となった市民の名前を刻んだ銘板が、町ごとに掲示されている。この災害を乗り越え、新たな願いを持ち、元気に立ち直ろうとする思いが伝わってくる。

平日だったが、近隣住民の方が子犬を連れて散歩されていた。

70代のご婦人に「だいぶ復興が進んできましたね」と問いかけると、「まだまだこれからですが、若い人たちが頑張ってくれているので、ありがたいです」。ご自身は大きな被害はなかったそうだが、「だんだんと復興してきているのは、街並みを見て感じています」と言われた。

確かに、この公園からは内湾と鹿折（ししおり）の街が一望でき、震災当初は焼け野原だった鹿折が、街として再生しつつある姿がうかがえる。

紫神社前商店街でキャラクターグッズを扱う商店主・高橋朋広さんに景気を伺ったところ、「コロナの影響もあったと思いますが、以前に比べて観光客の人出も戻りつつあるように感じます。3月になり、土曜・日曜の人出も確実に増えてきています。まだまだ景気がいいとは言えませんが…」とのこと。

また、「気仙沼出身の友人が、東京の神田でイタリア料理店を営んでおり、コロナ禍でも元気に頑張っています。これからは、もっと気仙沼色を出したらいいんじゃないかと話しています。海産物やイチゴなどの果実も豊富にあるので、どんどん地元の食材を取り入れてPRしていってほしいですね」と、待ちの姿勢から攻めの展開へと少しずつ前へ進めることを考えておられた。

まだまだ復興途上のこの街にあって、根本的な街のあり方について語ってくださった奥原志郎さん。

「被災された方々には、よく助かったね、よくここまで難儀を乗り越えてきたねと、その努力と懸命さに拍手を送りたいです。道路は整備され、津波が来た所はかさ上げされ、工場やスーパーや商店が、ポツリポツリ立ち並ぶようになってきました。以前、ここに何があったか思い出せないほどです。

ただ気になるのは、海が見えなくなっていることですね。高さ10メートルを超す防潮堤が、城壁のように海岸線を取り巻いています。これが『海と共に生きる漁業の街、気仙沼』です。この城壁は、宮城県が一番長いそうです。

海が見えなくて、海と隔てられて、『海と共に生きる』と言えますか？ 海が見えて、潮の匂い、色、風を感じてこそ〝海と生きる〟ではないでしょうか。

これは行政・政治の問題でもありますが、『海と共に生きる』ことは、自然と共に生きることで、自然を支配すること、拒絶することではありません。

この城壁は、人間の傲慢さが感じられ、これでいいのかと思います」

奥原さんの話を伺い、目先の施設の復興だけではなく、海、山、自然と共に生き、共に繁栄していくことが、人間や社会の本来の姿なのだと感じた。

（ひかり新聞編集長・大江　靖）

第2回防災出前講座　大阪にて開催

3月5日㈰に、金光教大阪センター（大阪市中央区）を会場に、第2回防災出前講座が開催されました。

肌寒さの中にも、春の日差しに恵まれた日でした。もちろん、屋内ですのでマスク着用など、コロナ感染防止対策を施しながらの開催となりました。

参加者は18名、スタッフが4名、合計22名でした。

主催者側との事前打ち合わせの中で、参加者の方々のいま最も関心があるのは、地震であるということが分かり、今回の講座のテーマを「地震から身を守る」としました。

たまたま講座の前夜、NHKテレビで、「南海トラフ巨大地震」をテーマにしたドラマが放送され、視聴された方は、防災に対する関心がより高まったようです。

＊

開催地の大阪では、差し迫った地震の脅威は、「南海トラフ巨大地震」と「上町断層帯地震」であることから、それぞれの被害想定や備えを主な内容としました。

今回も講師は、事前に数回の打ち合わせをして、講義内容のすり合わせを入念に行い、講座に備えました。特に性格の違う2つの巨大地震を、どのように伝えるかが一番のポイントです。

13時から開始。プログラムは、

・映像「南海トラフ巨大地震」
・「地震発生のしくみと南海トラフ地震、内陸型地震の大阪での被害想定」
・「地震から身を守る」
・映像「電気災害の備え」
・「グループ討議ーその時あなたはどうする」
・「地震発生時及びその後の行動について」で、16時すぎに閉会しました。

参加者のほとんどは大阪府下の方で、阪神・淡路大震災での直下型地震の経験や、東日本大震災の時の津波の惨状などの記憶もあり、真剣に取り組んでいただきました。

地震発生のメカニズムについては、専門的な話もあり、難しく感じた方もおられたようで、今後、映像・説明の仕方などに工夫が必要だと思いました。

しかし、どのような被害が想定されているか知ることは、その後の「地震への備え」や「地震発生時の行動」につながります。

「地震から身を守る」では、

① 自助・共助・公助
② 建物の安全性を高める
③ 家具類の転倒・落下防止対策
④ 非常備蓄品
⑤ 津波への備え
⑥ 液状化への備え
⑦ 災害用簡易トイレ

などで、食料のローリングストックの方法や簡易トイレの作り方では、現物を手にしながら、具体的に説明がありました。

「電気火災の備え」では、感震ブレーカや、停電時の保安灯などの紹介もありました。

反省会でも、実演された簡易トイレの作り方について、「今まで、市販品は高価で手が出せなかったけれど、今日教えてもらった方法だと作れそうです」という意見が出ました。家族で取り組むには格好の教材でした。

「グループ討議ーその時あなたはどうする」では、4グループに分かれ、各グループ2つずつ計8つの想定が出され、それをもとに、揺れている最中、及びその後の行動について、約15分間の話し合いが行われました。

例えば、「あなたは、木造住宅の多い下町に住んでおり、自宅も築50年の木造家屋です。冬の寒い朝、午前4時頃2階で寝ていたら突然、地震に襲われました」、「あなたは郊外から梅田のデパートに買物に来ました。買物も終わりお昼の時間になったので食事をしようと地下街を歩いていました。その時、地震が発生しました」などです。

南海トラフ巨大地震の場合、津波による人的な犠牲者が、被災地全域で、23万人も想定されています。

大阪では最短の津波到達時間も他の地域と比べ1時間から2時間と遅く、最大津波高も5ｍ程度ですが、新大阪、梅田、難波、南海本線を結ぶ海側が浸水域と想定されています。

しかも、液状化による防潮堤倒壊などで、津波が来る前に浸水することも予測され、大阪府推計では地震後すぐに避難しない場合の津波による犠牲者は13万人超となっています。ですから、この地域の地下街や平地は極めて危険なのです。

これなら作れるかな？

「簡易トイレの作り方」の説明

事前にそんな話を聞いていたことから、予想以上に活発に発言があり、討議後の各グループの発表内容も的確で、その後の「地震発生時及びその後の行動について」の講義内容と重なる部分が多くありました。

その後の反省会でも、「グループ討議の時間がもっとほしかった」という声がありました。

アンケートのご感想・ご意見の一部をご紹介します。

「南海トラフ巨大地震のことは以前から気になっていたが、直下型の上町断層帯地震の脅威について初めて知ったことはよかった」

「防災について考え直す機会をもてよかった」

「見聞きすること以上に常に考え、意識していかなければならないことを感じた」

「防災グッズも買うのではなく、家族で作るということに感銘を受けた」

「グループ討議で、自分がその場にいたときを改めて考えたとき、すぐに行動に移せるかなと思った。何もないときに想像しておくのはすごく大切だと改めて感じた」

参加者の皆さん、ありがとうございました。

今回のスタッフは藤原眞久、入田央、橋本敏廣、正田新一でした。

（正田新一・記）

熊本地震7年目の竹あかり

今年も、熊本地震7年目の追悼行事のお手伝いに参加しました。

これまで開催されていた木山仮設団地は3月末に閉鎖され、今年は昨年竣工した益城町復興まちづくりセンター「にじいろ」で行われました。

最初の地震が襲った4月14日、昼過ぎから20人ほどが準備を始めます。雨が降ったりやんだりで、竹灯ろうや、来られた方々が濡れないように、皆でテントを立てます。

テントの下で竹灯ろうを並べる人、竹を切ってさらに灯ろうを作ったり、願い事やメッセージを書く方と、それぞれが作業を進めます。これらの竹は、有志が竹やぶから切り出してきたものです。竹灯ろうとキャンドルジュンさんが持ちこんだ大型キャンドルも入れ、約1000本が並ぶ中、午後7時には1回目の黙とうが行われ、近所の子ども達も多く参加しました。地震のあった21時過ぎ、雨が本格的に降る中、150人ほどの方々が集まりました。参加者はこれまでで一番多く、町長さんも参加。

参加したある女性は、テレビのインタビューで、「この追悼のつどいは、当時共に苦労した方達や、毎年この集いに参加してくださるボランティアの方々と再会でき、楽しみにしています」と語っていました。

本震のあった4月16日 1時25分は深夜とあって、冷え込む中、30人ほどの参加でしたが、皆で犠牲者に祈りをささげると共に、さらなる復興を願いました。

（藤原眞久・記）

防災一口メモ（第10回）

「災害用伝言サービス」について

大きな災害発生時に、被災地への安否確認やお見舞い、問い合わせなどの電話が爆発的に増加し、電話がつながりにくくなるため、被災地への電話は控えめにし、また電話がつながっても手短にするよう前号でお伝えしました。そのような時の安否情報確認の手段として、災害用伝言サービスがあることもお知らせしました。

今回は、その「災害用伝言サービス」について紹介します。

このサービスは大規模な地震の発生等により、被災地への電話がつながりにくい状況となった場合に利用可能となります。提供の開始等は、テレビ、ラジオ、インターネット等で知らせてくれます。

３つのサービスを紹介しますが、家族の間で、どの方法で連絡を取るか決め、体験利用して、いざという時に迷わないようにしましょう。体験利用できるのは毎月１日･15 日、正月三が日（１月１日～３日）、防災とボランティア週間（１月 15 日～21 日）、防災週間（８月 30 日～９月５日）です。また、携帯電話会社が違っても伝言の確認は可能です。但し、緊急時なので伝言数や文字数は限られます。

１．災害用伝言ダイヤル（171）

災害時に、固定電話、携帯電話の電話番号宛に安否情報（伝言）を音声で録音（登録）し、全国からその音声を再生（確認）することができる。

【操作手順】

１．１７１をダイヤル。
２．ガイダンスに従って、録音の場合は１を、再生の場合は２をダイヤルする。
３．ガイダンスに従って、連絡を取りたい被災地の方の電話番号をダイヤルする。
４．伝言を録音・再生することができる。

・災害用伝言ダイヤル（171）は、「災害用伝言板（web171）」と連携しているため、それぞれで登録された伝言内容を、相互に確認が可能。

２．災害用伝言板（携帯電話各社）

携帯電話のインターネット接続機能で、被災地の方が伝言を文字によって登録し、携帯電話番号をもとにして全国から伝言を確認できる。

【伝言の登録方法】

１．携帯電話から災害用伝言板にアクセスする。（災害時は各社の公式サイトのトップ画面に案内が表示される）
　NTT ドコモ　http://dengon.docomo.ne.jp/top.cgi
　KDDI（au）　http://dengon.ezweb.ne.jp/
　ソフトバンク／ワイモバイル　http://dengon.softbank.ne.jp/
　上記以外の携帯電話はそれぞれの事業者の HP から確認する。
２．「災害用伝言板」の中の「登録」を選択（登録は被災地域内の携帯電話からのみ可能）。
３．現在の状態について「無事です」等の選択肢から選び、任意で 100 文字以内のコメントを入力。
４．最後に「登録」を押す。

【伝言の確認方法】

１．災害用伝言板にアクセス。伝言の確認は PC 等からも行うことができる。
２．「災害用伝言板」の中の「確認」を選択。全国からのアクセスが可能。
３．安否を確認したい方の携帯電話番号を入力し「検索」を押す。
４．伝言一覧が表示されるので詳細を確認したい伝言を選択する。

災害用伝言板（web171）の利用方法

パソコンやスマートフォン等から固定電話や携帯電話の電話番号を入力して安否情報（伝言）の登録、確認を行うことができる。事前に下記の URL から登録しておくと便利。

【操作手順】

１．災害用伝言板（web171）
　URL:https://www.web171.jp/ へアクセスする。
２．連絡をとりたい方の固定電話番号や携帯電話番号を入力する。
３．伝言を登録・確認することができる。

（総務省 HP「災害用伝言サービス」より抜粋）

タオルの備蓄について

皆様のご協力により、昨年、備蓄の清掃用タオルを７県９ヵ所に1300枚の支援ができました。

近年、台風・洪水等の被害が全国的に多発しています。まずは人命救助が最優先ですが、その後の復旧作業等でタオルがとても役立ちます。

ご自宅で余っているフェイスタオルとバスタオルの備蓄に、ご協力いただける方（グループ）は、ＨＰＡにご連絡ください。なお、タオルは新品と使用済みを仕分けして、皆さまのお手元で一時保管をお願いいたします。

一定量（段ボール一箱）になりましたら、事務局へご連絡ください。送り先をお知らせしますので、着払いでお送りください（送料はＨＰＡで負担します）。

編集後記

先日の石川県能登地方の地震で、珠洲市社会福祉協議会に５月９日、清掃用タオル200枚を送りました。

今後の防災出前講座ですが、第３回は６月24日に三重県津市で、第４回は９月９日に東京で開催します。受講ご希望の方は事務局まで!!

（大江　靖）

ひかり新聞　No.47　2023年（令和５年）５月20日
発行者：一般社団法人 ひかりプロジェクト
〒401-0304　山梨県南都留郡富士河口湖町河口1975
電 話　0555－72－8191　　FAX　0555－76－6696
https://www.hikari-project.org　E-mail:hpa-office@hikari-project.org